言語文化研究　第４号　67-85　2026年３月
Linguistic and Cultural Research
Vol. 4 March 2026 pp. 67-85.

論　　文

テイナイ形におけるアスペクト仮説の検証

趙　　麗　雯

１．はじめに

日本語におけるアスペクトは、習得が難しい文法項目の一つとされており、その習得に関する研究は主に二つの側面から進められている。第一は、「動詞の語彙的アスペクトが文法的アスペクトの習得にどのように影響しているか」というアスペクト仮説の検証であり、第二は、アスペクトの代表的な形式であるテイル形の各用法の習得順序を解明する研究である。

中でもアスペクト仮説の検証については、日本語の習得に限らず他言語の習得においてもその検証が多数の研究で試みられている。さらには第二言語としての習得に限らず、母語としての使用においても研究されており、極めて普遍性の高いものであると報告されている。

しかし、従来の研究は主に肯定のアスペクト表現を対象としており、否定においても同様の傾向が見られるかどうかは、未だ検証がなされていない。本稿では、日本語アスペクト仮説の普遍性を検証する一環として、否定のアスペクト表現であるテイナイ形の習得が、アスペクト仮説と一致するかどうかを明らかにする。

２．先行研究

２．１　アスペクト仮説とは

アスペクト仮説は、動詞の語彙的アスペクトとテンス・アスペクト形態素との共起関係を論じた理論である（Andersen & Shirai, 1994）。主な主張は「動詞はその語彙的アスペクトに近いテンス・アスペクト形態素と結びつきやすい」という点にある。

アスペクト仮説の課題を整理するにあたり、まず前提として、「文法的アスペクト」と「語彙的アスペクト」の概念について述べる。文法的アスペクトとは、テイル、テアルなどのアスペクト形式が動詞と連用することで、動作や事態の様相を表す言語機能である。その中心的な用法は、以下に示す「動作の持続」と「結果の状態」である。(1) は「遊ぶ」という動作・作用が進行中であることを表し、(2) は「ペンが落ちた」結果から生じた状態を表す。

（1）子供たちは公園で**遊んでいる**。（動作の持続）
（2）そこにペンが**落ちている**。（結果の状態）　（菅谷，2002a：71）

語彙的アスペクトは、動詞自体が持つ意味特徴によって示されるアスペクトであり、動詞の「内的時間的性質」とも言える。語彙的アスペクトの分類については、Vendler（1967）の理論が通説である。Vendler（1967）は、状況が動的か静的かを示す動的性（±dynamic）、必然的な終結点があるかないかを示す限界性（±telic）、持続的か瞬間的かを示す瞬間性（±punctual）の３つの意味要素に基づき、動詞を状態動詞・活動動詞・達成動詞・到達動詞の４種に分類している。枠組みを以下の表１に示す。

表１　Vendler（1967）の動詞の分類（訳語は影山，1996による）

具体例			意味特徴			解説
動詞分類	日本語	英語	動的	限界的	瞬間的	
状態動詞	ある　できる	love know	−	−	−	動きがない状態を示すもの
活動動詞	走る　歩く	run play	+	−	−	動的かつ継続的なもの
達成動詞	椅子を作る 風呂を沸かす	make a chair walk to school	+	+	−	動的かつ継続的、それ以上先へ進めない動作終結点があるもの
到達動詞	死ぬ　落ちる	die drop	+	+	+	継続的ではなく、動的で限界性があるもの

（影山，1996；西・白井，2004に基づいて筆者作成）

Andersen & Shirai（1994, 1996）は Vendler（1967）の枠組みを用いて語彙的アスペクトが文法的アスペクトの習得に与える影響を論述し、アスペクト仮説を提唱している。すなわち、ある文法的アスペクトを表す形態素のもつ意味要素が、動詞の語彙的アスペクトと一致する度合いによって、両者の結びつきやすさが決まるとされる。具体的には以下のように説明できる。

過去を表す形態素は、［＋限界性］［＋結果性］［＋瞬間性］という意味要素を有する。そのため、［＋限界性］［＋瞬間性］という性質を持つ到達動詞と結びつきやすい。一方、進行を表す形態素は［＋動的］［－限界性］という意味要素を有しており、［＋動的］［－限界性］［－瞬間性］という性質を持つ活動動詞と、［＋動的］［＋限界性］［－瞬間性］という性質を持つ達成動詞と結びつきやすいということである。

２．２　アスペクト仮説の検証

アスペクト仮設の検証は第一言語習得に端を発し、その後、第一言語のみならず、第二言語習得においても様々な視点から検証が盛んになされており、仮説と一致した結果が多数報告されている。

例えば、Bronckart & Sinclair（1973）は、フランス語を母語として習得している幼児74名を対象に、「おもちゃの動作を描写する」というオーラルテストを実施した。その結果、「状態変化を伴う動詞が過去形と結びつきやすい」ことが確認された。

Bloom, Lifter & Hafitz（1980）は、英語習得中の幼児４名の自然発話を分析した結果、進行形 *-ing* は「継続的で非完成的な性質を持つ動詞」に多く使用され、過去形 *-ed* は「非継続的で完成的な性質を持つ動詞」に多く使用されると報告している。

Andersen & Shirai（1994, 1996）は、Vendler（1967）の枠組みを用いて各種類の動詞の特徴を明らかにしたうえでアスペクト仮説を提示した。そして同研究は英語学習者を対象に第二言語習得におけるアスペクト仮説の検証を行い、学習者が受ける教室内外のインプットがプロトタイプ形成に与える影響を論述することで高く評価されている。

鈴木（2012）は初級英語学習者を対象に、タスク中心教授法に基づき、週３回計10週間の口頭テストを行い、過去形態素の習得がアスペクト仮説と合致することを立証した。進行形態素の習得は教室内のインプットの影響で立証できなかったものの、Andersen & Shirai（1994, 1996）の結論の裏付けとなっている。

その他では、L1の習得においては、韓国語の柳（2013）、ロシア語の Stoll（1998）、トルコ語の Aksu-Koç（1998）等が代表とされている。L2の習得においては、英語の Bardovi-Harlig（1998）、Finger（2001）、イタリア語の Giacalone-Ramat（2002）、カタロニア語の Comajoan（2006）、スペイン語の Salaberry（2002）等が挙げられる。

２．３　日本語におけるアスペクト仮説の検証

アスペクト仮説の主張を日本語の文法体系に当てはめると、以下の対応関係となっている。

まず、到達動詞の「［＋限界性］［＋瞬間性］」という語彙的アスペクト要素が、「過去の事実」を表すタ形、及び「結果の状態」を表すテイル形と一致性を持つため、到達動詞はタ形及び「結果の状態」を表すテイル形と結びつきやすい。次に、活動動詞の「［＋動的］［－限界性］［－瞬間性］」という特性が、テイル形の「動作の進行・持続」を表す意味要素と高い適合性を示すため、活動動詞は「動作の持続」を表すテイル形と結びつきやすい。

このような仮説が日本語のアスペクト形式テイル形の習得に関して成立するか否かについては、これまで様々な視点から検証が行われてきた。代表的な研究をまとめたものは下表２である。

表２　日本語におけるアスペクト仮説の検証

	資料種類	研究対象	結論	結論
黒野 （1995）	縦断 文法テスト	JSL 学習者（初級）17名 母語：中国語、ベンガル語	「結果の状態」の用法は、「動作の持続」の用法より習得が困難である。	○
簡・中村 （2009）	横断 ストーリーテリング実験	JFL 学習者（中級、上級）各25名 母語：中国語 日本語母語話者　35名	「活動動詞＋動作の持続」→「状態動詞＋動作の持続」「到達動詞＋動作の持続」	○
Shirai & Kurono （1998）	縦断 文法テスト	JSL 学習者（初級）17名 母語：中国語、英語等 期間：来日３ヶ月～９ヶ月 日本語母語話者	テイル、テイタいずれも、「動作の持続」より、「結果の状態」の習得が困難である。	○
小山 （2004）	横断 文法テスト	JSL 学習者（初級後半～中級後半）10名 母語：韓国語　中国語　他	動作の持続＞結果の状態	○
SHAHBAZI （2020）	横断 文法テスト	JFL 学習者（初級～上級）83名 母語：ペルシア語	「継続動詞」→「変化動詞」	○
西坂 （2019）	横断 文法テスト	JFL 学習者（中級、上級）各25名 母語：中国語 日本語母語話者　54名	①「動作の持続」→「結果の状態」 ②達成動詞において、「財布が落ちる」とタに、「椅子が壊れる」とテイルに結びつきやすい。	○
菅谷 （2002b）	横断 発話データ	JSL 学習者（OPI 初級上）３名 母語：ロシア語　英語　フランス語	①英語・フランス語母語話者：到達動詞とテイル形に結びつきやすい。 ②ロシア語母語話者：活動動詞とテイル形に結びつきやすい。	△
砂川 （2022）	横断 作文コーパス	JSL 学習者（中級後半） 母語：韓国語、ベトナム語、英語、ハンガリー語など６か国の言語	①「活動動詞」→「到達動詞」 ②ハンガリー語話者：「完成」→「進行」	△
江口 （2025）	横断 絵描写テスト	JSL 学習者（中級前半） 母語：韓国語、ベトナム語、英語、ハンガリー語、インドネシア語など７か国の言語	①「活動動詞」→「到達動詞」 ②インドネシア語とハンガリー語話者：「進行」不使用	△
Shibata （1999）	横断 ストーリーテリング実験	英語を母語とする日本語学習者４名（大学４年生） 日本語母語話者４名	母語話者と学習者の使用したテイルにおいては、活動動詞は到達動詞より延べ語数が多い一方、異なり語数は少ない。	△
菅谷 （2003）	縦断 発話データ	JSL 学習者（初級）２名 母語：テルグ語、ロシア語	①教室習得：「動作の持続」→「結果の状態」 ②自然習得：「結果の状態」＝「動作の持続」	△
陳 （2014）	縦断 作文コーパス	JFL 学習者（初級～上級）40名 母語：中国語	文末：「活動動詞」→「到達動詞」 連体修飾節：「到達動詞」→「活動動詞」（パーフェクト） 動詞分類の差はない（繰り返し、単なる状態）	△
橋本 （2006）	縦断 発話データ	来日６ヶ月の L2幼児（３歳） ３歳６ヶ月～４歳４ヶ月）	活動動詞→達成動詞→到達動詞	○
塩川 （2007）	横断 文法テスト	JSL 学習者（初級、中級、上級）各21名 日本語母語話者	連体修飾節においては「活動動詞＋テイル」、「到達・達成動詞＋タ」という結びつきが多い。	○
Shibata （1998）	横断 発話データ	滞日期間５年の就労者 母語：ポルトガル語	到達動詞→活動動詞	×
Ishida （2004）	縦断 発話データ	JFL 学習者　４名 母語：英語　中国語	テイルの正用率では、「結果の状態」が「動作の持続」より高い。	×

注：○・△・×はそれぞれアスペクト仮説を支持・部分的支持[1]・支持しないことを示す

２．４　先行研究のまとめと問題意識

以上で示したように、多くの検証は４種類の動詞がテイル形と結びつく順序と、テイル形の用法別の習得難易度という二つの視点からなされてきた。そして、データの種類（自然発話・テストデータ等）、研究方法（縦断研究・横断研究等）、対象者（学習者の母語・習熟度等）が多様であるものの、アスペクト仮説とほぼ一致した結果が多い。

例えば、黒野（1995）は、短期集中プログラムで日本語を学ぶ初級学習者17名を対象に、３ヶ月に１回、計３回の文法性判断テストを実施した結果、学習者は母語を問わず「動作の持続」は最初から使用するのに対し、「結果の状態」の習得は困難であり、タ形との混用があると報告している。

簡・中村（2009）はコマの漫画を用いてストーリーテリング実験を行い、学習者のテイル形習得に影響する複数の要因（動詞の語彙的アスペクト、文法的アスペクト、統語的環境、時間副詞との共起の有無、日本語学習年数）を統合的に考察した。統計的分析の結果、「動詞の語彙的アスペクト」と「日本語学習年数」の影響が主要因であり、学習年数の増加に伴い活動動詞の習得は進むものの、達成動詞の習得は終始困難であることが判明した。

また、文法テストを用いたShirai & Kurono（1998）と小山（2004）は、JSL学習者の母語（漢字圏・非漢字圏）や日本語レベルに関係なく、活動動詞がテイルと先に結びつき、「動作の持続」が「結果の状態」より習得しやすいというアスペクト仮説に合致した結果を報告している。

一方、菅谷（2002b）ではフランス語、英語、ロシア語を母語とするJSL学習者のOPI資料を分析した結果、ロシア語母語話者はテイル形に活動動詞を多く使用するのに対して、英語とフランス語母語話者は到達動詞を多用する傾向が見られた。このアスペクト仮説と異なった傾向について、菅谷（2002b）は、ロシア語に進行形がないことが関係すると述べ、母語の影響を指摘している。砂川（2022）や江口（2025）他も同じく、母語体系の進行形／過去形有無による影響に言及している。

また、学習者の母語以外で仮説が支持されない条件を分析する研究がある。Shibata（1999）は英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者を対象に、絵本 *Frog, where are you?*（Mayer, 1969）を用いてストーリーテリングの実験を実施した結果、母語話者と学習者のいずれのテイルの使用においても、延べ語数の使用率では活動動詞＞到達動詞、異なり語数では到達動詞＞活動動詞となったことを報告し、母語話者のインプットの頻度の影響を強調している。

それ以外にも、JFLとJSLという学習環境の違いにより異なる傾向が生じることを示し、学習環境の影響を指摘した菅谷（2003）や、連体修飾節と文末を統合的に考察し、連体修飾節におけるテイルの習得に動詞の語彙的意味の影響は見られず、４種類の動詞の差はないという結果に基づき、テイル形の構文的位置の影響を論じた陳（2014）等も挙げられる。

以上に対して、調査の結果がアスペクト仮説と反対となったのはShibata（1998）とIshida（2004）である。Shibata（1998）は、ポルトガル語を母語とする就労者を対象に行ったインタ

ビューを分析し、テイル形（名古屋方言のトル）には、まず到達動詞が用いられているという結果を示している。しかし、同研究にて観察された用例は「怒っとる」（７回）と「寝とる」（１回）の２種類のみであり、Vendler（1967）の動詞分類枠組みを基準に検討すると、いずれも到達動詞ではなく、活動動詞に分類できるのではないかという指摘がある（Li & Shirai, 2000）。

Ishida（2004）はハワイ大学で日本語を学ぶ学習者との会話データを分析した結果、調査期間を通じて常に「結果の状態」が「動作の持続」より正用が多く、アスペクト仮説と明確に一致していないことを報告している。この結果について Ishida（2004）は、学習者が使用していた教科書において、「結果の状態」が定型表現として先に導入されていたのが原因だと考えている。

以上の研究結果を踏まえ、アスペクト仮説に基づくテイル形の習得パターンに関して、以下の４点にまとめることができる。

①テイル形が動詞と結びつく過程については、活動動詞が最初にテイル形と結びついて使用され、その後次第に他の動詞タイプ（状態動詞、達成動詞、到達動詞）へと使用範囲が広がっていく（Shibata, 1999；橋本，2006；塩川，2007；簡・中村，2009；陳，2014；SHAHBAZI, 2020；砂川，2022；江口，2025）。

②テイル形（テイタ形を含む）の用法別の習得難易度については、「動作の持続」が最初に使用され、その後に「結果の状態」へと使用が拡大していく（黒野，1995；Shirai & Kurono, 1998；菅谷，2002b；小山，2004；簡・中村，2009；西坂，2019）。

③普遍的な習得パターンについては、「プロトタイプ理論」を用いて説明しようと試みている。すなわち、「動作の持続」がテイル形のプロトタイプ用法であり、学習者は習得初期に、この用法と意味が近い活動動詞を優先的にテイル形と結びつけ、徐々に「結果の状態」などの非プロトタイプ用法へと拡張していく（橋本，2006；塩川，2007）。

④但し、普遍的な要因が働く一方で、特定の条件において、習得の様相が変動する特徴的な現象も報告されている。学習者の母語、学習環境、教材における文法事項の導入順序、テイル形の構文的位置などが影響し、特定の用法の習得が遅延したり、早期に習得されたり、特徴的な誤用パターンが出現したりする場合もある（菅谷，2002b；Ishida, 2004；簡・中村，2009；江口，2025；砂川，2022；江口，2025）。

以上の考察から明らかなように、日本語におけるアスペクト仮説の検証は、動詞タイプ、用法、学習者背景など多様な視点から盛んに行われてきたが、いくつかの課題は未だに存在すると考えられる。

最も重要な課題は、研究対象がテイル形に限定されている点である。従来の検証は、テイル形のみに注目し、否定のテイナイ形の習得については、「テイル形と同様である」という「先入観」のもとで検討が進められている。

仮に、アスペクト仮説が指摘する普遍的な習得パターンが、否定のテイナイ形においても確認されれば、教育現場で「テイナイ形を単にテイル形の否定形として扱う」という指導方法に

は問題がないと判断できる。逆に、テイナイ形の習得がアスペクト仮説と異なるパターンを示す場合には、テイナイ形を「テイル形とは独立した文法事項」として位置づける必要があると考えられる。

すなわち、アスペクト仮説が否定文のアスペクト形式であるテイナイ形の習得にも当てはまるか否かという課題は、今後のアスペクト習得研究において、極めて重要な一部分となると言っても過言ではない。したがって、アスペクト仮説の普遍性を検証するには、否定のテイナイ系を慎重に扱う必要があろう。

次に、多くのアスペクト検証は、主に二つの視点から行われてきた。一つは活動動詞、到達動詞といった動詞タイプの出現順序を観察する視点である。もう一つは「動作の持続」「結果の状態」といったテイル形の用法別習得難易度を考察する視点である。

但し、アスペクト仮説の課題である「動詞の語彙的アスペクトが文法的アスペクトの習得にどの程度影響するか」を究明するには、このような研究だけでは不十分である（菅谷，2005）。その理由は、「動詞＋テイル形」という結びつきは、動詞タイプとテイル形両方の多義性により、意味用法も複雑となっているためである。

例えば、活動動詞がテイル形と結びつくと常に「動作の持続」の意味になるわけではなく、以下の（4）（5）のように「習慣」、「経験」などを表すこともあるからである。同様に、状態動詞でも、テイル形に使われると、（6）のように動作や現象が持続中であることを示すことも可能である。そのため、アスペクト仮説を徹底的に検証するには、動詞タイプかテイル形のどちらかのみに注目するだけでなく、それぞれの動詞タイプを「動作の持続」や「結果の状態」のどの用法で用いているかも調査する必要がある。

（3）今新聞を**読んでいる**。（動作の持続）
（4）毎日新聞を**読んでいる**。（習慣）
（5）その本、もう**読んでいる**。（経験）
（6）富士山がきれいに**見えている**。（動作の持続）　（菅谷，2005：45）

3．研究目的と研究仮説

以上を踏まえ、本稿の課題はアスペクト仮説の検証の一環として、アスペクト表現のテイナイ形を取り上げて、新たな視点からその習得状況を考察することである。

本稿では、動詞の語彙的アスペクトとテイナイ形の多義性の二つの側面から、否定のアスペクト表現の習得パターンが、アスペクト仮説の主張と一致するか否かを明らかにすることを目的とする。

具体的には、アスペクト仮説に基づき、テイナイ形の習得に関して、次のページに３つの仮説を立てて検証を行う。

仮説１　活動動詞が先にテイナイ形に用いられ、他の動詞タイプへ使用が広がっていく。

仮説２　「動作の持続」を否定するテイナイ形（以下、動作の持続）は「結果の状態」を否定するテイナイ形（以下、結果の状態）より先に習得される。

仮説３　活動動詞は「動作の持続」と結びつきやすく、両者の組み合わせの使用頻度が最も高い。

４．研究概要

４．１　分析資料

本稿は『山東省多民族JFL作文コーパス』（2023）で収集した中国語を母語とする日本語学習者の作文を分析資料とする。山東省多民族JFL作文コーパスには、2019年から2022年まで、山東工商学院の日本語科に在籍していた漢族学部生27名、及び山東省内大学に在籍していた少数民族JFL学習者13名（朝鮮族８名、内モンゴル族４名、ウイグル族１名）を対象とし、１年次後半からの３年間、合計25回の作文を収集した縦断的なコーパスである。

作文は調査ごとに定められたテーマに基づいて執筆され、字数は約300～600字で統一されている。それぞれの作文の話題、状況などは様々で、時間表現に極端な偏りはなく、且つ学習者が初級から上級までいるため、習熟度別にも確認できる書き言葉コーパスとなっている。

本稿は学習者のテイナイ形習得状況を長期的かつ連続的に観察することを目的として、最終段階まで参加し続けた漢族学習者12名のデータを取り上げて調査した。学習者の習得状況の変化を明確に示すように、調査期間の３年半を学年に基づき、１年、２年、３年という３段階に分けて考察した。それぞれの段階の収録期間、その期間における学習者の学習歴、各期間の収録回数および作文のテーマを表３に示す。

表３　調査時期、学習歴と作文テーマ

収集期間	学年	収集回数	作文テーマ
2019.12－2020.7	１年	５回	私の家族、冬休み、絵の描写１、私の部屋、楽しかった一日
2020.9－2021.7	２年	10回	悩み事、将来の夢、絵の描写２、忘れなられない人、趣味、お正月、オンライン授業、「父の日」に際して、自立とは、中日関係
2021.9―2022.6	３年	10回	野良犬、旅行、最近読んだ本、友情、祭り、絵の描写３、大切にしているもの、SNSについて、日本語との出会い、私の恋愛観

４．２　研究手順

下記の手順で分析を行った。

①作文データからテイナイ形の使用例を抽出した。実際の検索においては、テイマセン、テイナカッタ、テイナクテや連体修飾節に使われたテイナイ形などもキーワードにして、データ

の漏れを防いだ。

②抽出したテイナイ形の使用例について、正誤用判断を行った。具体的には、「動詞の語彙的アスペクトとテイナイ形の意味用法が矛盾しないか」「文の目的と合致する否定ニュアンスを表しているか」を検討し、正用と判断された用例のみを本調査の分析対象として選定した。なお、本稿はテイナイ形の選択に絞っているため、動詞の活用形の誤用、自他動詞の混用などがあっても正答と見なす。

③テイナイ形に使用された動詞を状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞に分類した。動詞分類は従来の分類の枠組みに従い、動詞の語彙的アスペクト判別テスト（白井，2004）を参考とし、金田一（1950）の分類基準も考慮して行った。

④テイナイ形が表す意味を前後の文脈を踏まえたうえで抽出された用例を「動作の持続」、「結果の状態」に分類した。

最後は以上を踏まえ、抽出された用例について、各動詞タイプの出現回数（延べ数と異なり語数）、各テイナイ形用法の出現回数（延べ数）、動詞タイプと用法の組み合わせ出現回数（延べ数）をそれぞれの仮説に対応させて、集計・分析を行った。

なお、②③④の分類を行う際、筆者自身の判断だけによらず、先行研究にあげられた例を裏付けとしながら、日本語母語話者（日本語教育学関連者）３名と討論し、３人以上が一致した意見を採用した。

５．結果と分析

５．１　動詞タイプとテイナイ形との結びつく順序

本稿ではアスペクト仮説に基づき、テイナイ形に用いられる動詞の習得について、「テイナイ形は最も先に活動動詞と結びつき、その後次第に状態動詞、達成動詞、到達動詞といった他の動詞タイプへ使用範囲が広がっていく」という仮説１を立てている。

仮説１の検証を行うため、まずテイナイ形に使用された全ての動詞を状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞の４タイプに分類し、各動詞タイプの出現状況を学習段階ごとに集計し、表４にまとめた[2]。表４を通して、全体的な動詞タイプの使用傾向を把握することができる。

さらに学習段階ごとにテイナイ形に使われた各動詞タイプの異なり数の割合を算出し、その推移を図１に示す。図１を通して、「活動動詞が最も先に使用され、その後使用範囲が広がる」という仮説１の成り立ちを判断することができる。

表４　テイナイ形に使われた動詞

	状態動詞	活動動詞	達成動詞	到達動詞
１年				持つ、決める（２）、始まる、覚える
２年	違う	勉強する、食べる、考える		やる（３）、持つ（７）、言う、理解する、なる、できる、終わる
３年	見える	体験する、勉強する、運動する、思う、重視する、聞く（２）、やる	作る、建設する	覚える（２）、決める（３）、持つ（４）、なる、読み終わる、慣れる、気がつく、入る、始める、完成する、立つ、結婚する

注：（　）の数値は該当動詞の延べ語数である

１年（学習初期）では、テイナイ形と結びついた動詞は到達動詞のみであり、他の動詞タイプは全く出現しなかった。そして、観察された到達動詞は例（7）のように、「まだ」と連用した用例が多い。

２年になると、到達動詞の使用数が増加したことに加え、活動動詞と状態動詞が初めて出現した。ただし、使用数は非常に限定的で、状態動詞が１語、活動動詞が３語に過ぎない。この段階では、動詞タイプの適用範囲がわずかに広がったものの、依然として到達動詞の使用が最も目立っており、しかも、観察された動詞の多くは「持つ」のような特定の動詞、或いは（８）の「やる」のような適用範囲の広い動詞に集中している。

３年（学習後期）においては、到達動詞はもとより、「活動動詞」の使用数も大幅に増加し、両者が共に高頻度で使用されるようになった。さらに、動詞の異なり語数が増え、「慣れる」「気が付く」、「見終わる」、「入る」といった意味的・機能的により具体性の高い動詞へ広がる傾向が見られ、（９）はその典型的な１例である。

(7) 冬休みはまだ**始まっていません**。(CJFL02：１年)
(8) 母は今仕事を**やっていない**。(CJFL05：２年)
(9) サッカーは卓球ほど**重視されていない**が、サッカーを好きな人が一番多いです。(CJFL10：３年)

次に、図１は動詞タイプ別の延べ語数の割合の変化を示すものである。

１年から３年までの調査期間を通じて、常に到達動詞の使用割合が活動動詞より高いことが分かった。その具体的な使用割合は１年の100％から、２年79％、３年の62％へと段階的に減少する傾向が確認できる。一方で、２年次以降には活動動詞や状態動詞が出現し、その割合がそれぞれ16％（２年）と27％（３年）、５％（２年）と４％（３年）に達し、レベルの向上とともに徐々に増加する傾向が見られた。すなわち、到達動詞から多様な動詞タイプへと使用が広がっていく傾向が認められる。

以上の結果から、テイナイ形の習得においては最も先に到達動詞と結びつき、その後次第に活動動詞を含む他の動詞タイプへ使用範囲が広がるというパターンが観察された。したがって、

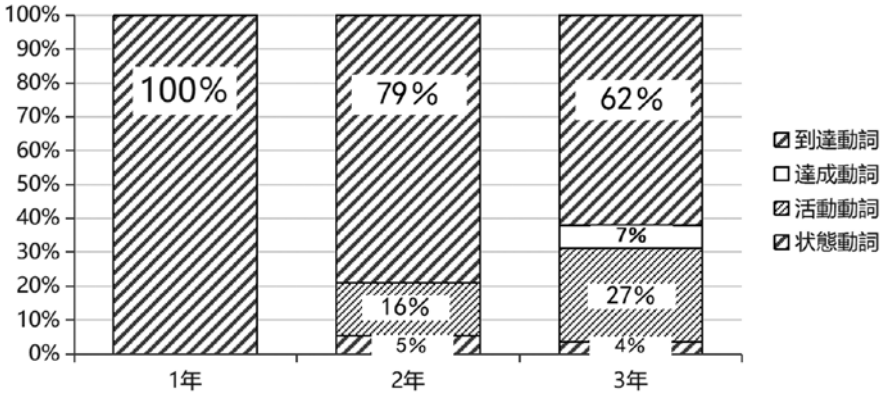

図１　テイナイ形に使われる動詞タイプの割合

「活動動詞が最初に結びつく」という仮説１は支持されない。

５．２　「動作の持続」と「結果の状態」の習得順序

アスペクト仮説に基づき、テイナイ形の用法別の習得の難易度に関して、「『動作の持続』は『結果の状態』より先に習得される」という仮説２を立てている。

この仮説の検証を行うため、学習者が各時期に産出した「動作の持続」と「結果の状態」に分類される用例（延べ数）と全体に占める割合を時期ごとに集計した。その結果は表５になる。

表５「動作の持続」と「結果の状態」の比較

用法	１年	２年	３年	合計
動作の持続	0（0）	2（14.29）	7（38.89）	9（26.47）
結果の状態	2（100）	12（85.71）	11（61.11）	25（73.53）
合計	2	14	18	34

$\chi^2 = 3.214$　$p = 0.200 > 0.05$

注：（　）は使用割合％である

表５に示されたテイナイ形の用法別の出現データを分析すると、仮説２の予測とは明確に異なる結果が得られた。「結果の状態」は「動作の持続」より先に出現し、しかも「結果の状態」が１年に２例、２年に12例、３年に11例であるのに対し、「動作の持続」は１年に０例、２年に２例、３年に７例であることから、いずれの年次においても「結果の状態」が「動作の持続」を上回っている。

また、「動作の持続」と「結果の状態」の割合は学習歴の推移にしたがって変化が見られたが、学習者の学習歴と両用法の使用について、２変量χ^2検定を行ったところ、有意差が見られなかった。すなわち、学習歴が進むことによる顕著な増加・減少の傾向は見られず、学習歴に

より習得が進むとは判断できなかった（$p=0.200>0.05$）。

一方、「動作の持続」と「結果の状態」の両用法以外に、趙（2015a）で指摘した「未完了」と「完全否定」を表すテイナイ形の使用が学習初期に出現し、その数が目立ったことも興味深い。以下の（10）～（13）に例を示す。下記２例は「未完了」である。過去の事態「決める」、「読み終わる」を現在に基づいて議論し、出来事が発話時（現在）まで実現されていないが、その実現の可能性が残されていることを示すものを表す。

（10）まだ、将来は**はっきり決めていません**。（CJFL07：１年）
（11）この小説は全部**読み終わっていない**が、とても好きです。（CJFL12：３年）

さらに２年になると、（12）と（13）のような「完全否定」の使用が観察されている。以下の２例はいずれも過去の事態を現在に基づいて議論している。「言う」と「交流になる」という出来事が発話時（現在）まで実現されておらず、しかも、その実現しない結果が既に結論になり、実現の可能性は残されておらず、「前現在のテンスから解放された用法」[3]（高橋，1988：89）である。

（12）父は悪いことを何も**言っていない**。（CJFL06：２年）
（13）どうしても対面の**交流になっていなくて**、学生は違和感を感じる。（CJFL09：３年）

上記の「未完了」と「完全否定」の使用は目立っており、その使用状況を検討することで、テイナイ形の習得パターンを解明する必要があると思われる。そこで、両用法及びその他の用法の使用回数を時期ごとに集計し、「動作の持続」、「結果の状態」と合わせて表６に示している。

表６　テイナイ形の用法別の使用状況

		動作の持続	結果の状態	未完了／完全否定	その他
学年	１年	0（0）	2（8.00）	3（21.43）	0（0）
	２年	2（22.22）	12（48.00）	4（28.57）	2（40.00）
	３年	7（77.78）	11（44.00）	7（50.00）	3（60.00）
合計		9	25	14	5

注：（　）は使用割合％である

表６で示したように、１年で「結果の状態」とともに「未完了」と「完全否定」が出現し、調査時期を通じて、１年に３例、２年に４例、３年に７例と、「動作の持続」より多用され続ける傾向が示された。

「未完了／完全否定」という用法の使用も多く、初期段階から「結果の状態」と共に習得され

ている可能性が考えられる。「動作の持続」と「結果の状態」の両方法の難易度については、「結果の状態」は「動作の持続」より先に習得され、その使用割合は調査期間を通じて、常に「動作の持続」を上回っていることが分かった。いずれも、「『動作の持続』は『結果の状態』より先に習得される」という仮説２を支持しない結果である。

５．３　動詞タイプとテイナイ形の用法との対応関係

アスペクト仮説に基づき、動詞タイプとテイナイ形の用法との対応関係について、「活動動詞は『動作の持続』と結びつきやすく、両者の組み合わせの使用頻度が最も高い」という仮説３を立てている。抽出したテイナイ形の用例を、「動詞タイプ」（状態動詞・活動動詞・達成動詞・到達動詞）と「テイナイ形用法」という二軸に基づき分類を行い、両者の対応関係をまとめた。

なお、前述の分析で確認したように、「動作の持続」と「結果の状態」以外に、「未完了」と「完全否定」の使用例が多く見られた。これら２種類の用法がテイナイ形の意味体系を構成する重要な要素であると判断し、「未完了／完全否定」及び「その他」を含めた計４種類の用法と、動詞タイプとの対応関係を統合して、表７で示した。

表７　動詞タイプとテイナイ形の用法との対応

	動作の持続	結果の状態	未完了／完全否定	その他
状態動詞	0（0）	1（4.00）	0（0）	1（20.00）
活動動詞	8（88.89）	0（0）	0（0）	3（60.00）
達成動詞	1（11.11）	0（0）	1（7.14）	0（0）
到達動詞	0（0）	24（96.00）	13（92.86）	1（20.00）
合計	9	25	14	5

注：（　）は使用割合％である

「動作の持続」の用法は９例で、そのうち活動動詞は８例、達成動詞は１例観察された。仮説では、活動動詞は「動作の持続」に結びつきやすいと述べており、活動動詞の９例うち８例が「動作の持続」と結びついていることが確認された。この点においては、仮説３「活動動詞は『動作の持続』と結びつきやすく、両者の組み合わせの使用頻度が最も高い」の前半の部分が成立すると言える。

一方で、「結果の状態」の用法は25例あり、動作の持続の約2.8倍に達した。そのうち、到達動詞は24例、状態動詞は１例観察され、「到達動詞＋結果の状態」の組み合わせの使用頻度が最も多いことが明らかとなった。また、「到達動詞＋未完了／完全否定」の組み合わせも目立ち、計13例が観察された。両方とも使用頻度が「動作の持続」を上回っている。以上の結果から、「活動動詞は『動作の持続』と結びつきやすく、両者の組み合わせの使用頻度が最も高い」という仮説３の後半の部分は成立しないと言える。

上記の４種類以外にも、各動詞タイプがテイナイ形と結びついて、(14) のような反復・習慣の否定、(15) のような単純状態の否定など、様々な意味を表すことから、テイナイ形そのものの複雑性が窺える。

(14) この２、３年間、あまり旅行に**行っていない**。(CJFL09：３年)
(15) 彼の根本的な考え方は私と**違っていない**が、話し合いが進めない。(CJFL11：２年)

６．結果分析[4]

６．１　結果のまとめ

本稿では、アスペクト習得研究において普遍的であると言われている「アスペクト仮説」がテイナイ形の習得に成立するかどうかを明らかにするために、３つの仮説を立てて、学習者の作文コーパスを用いて検証を行った。その結果、テイナイ形の習得に関して、以下の３点が明らかになった。

①動詞タイプとテイナイ形が結びつく順序について、到達動詞が先にテイナイ形に用いられ、次第に他の動詞タイプへ使用が広がっていく。

②「動作の持続」と「結果の状態」の習得順序について、「結果の状態」を否定するテイナイ形は「動作の持続」を否定するテイナイ形より先に習得される。また、「未完了」と「完全否定」という用法も「結果の状態」とともに、早い段階で習得される。

③活動動詞は最も「動作の持続の否定」と結びつきやすいが、使用頻度が「到達動詞＋結果の状態」と「到達動詞＋未完了／完全否定」より低い。

以上、「活動動詞は最も『動作の持続』と結びつきやすい」という部分がアスペクト仮説と一致する以外、いずれもアスペクト仮説を支持しない結果である。

６．２　結果の分析

これまでのアスペクト習得研究は、テイナイ形もテイル形と同様の習得パターンを示すという「先入観」の下で分析が進められてきた。しかし、本研究の結果は、学習者がテイル形と異なるメカニズムでテイナイ形を習得する可能性を強く示唆している。特に、肯定の場合にプロトタイプ用法とされてきた「動作の持続」は、否定の場合においては、出現時期も「結果の状態」より遅く、使用頻度も低かった。それに対して、「未完了／完全否定」を表すテイナイ形が早い段階に出現し、多用され続けていることは興味深い。そこで、本節では、プロトタイプ理論をもとに、分析を試みていく。

まず、調査対象者が使用していた初級教科書[5]においては、テイナイ形は「モウ～シタカ？」の否定応答として、「まだ」とともに先に導入される。その後、「動作の持続」を表すテイル形

の否定として、テイル形の同時に提示される。その後「結果の状態」と「反復・習慣」を表すテイル形が導入され、その否定形式のテイナイ形は練習問題に提示され、本文と文法説明などには挙げられていない。

そして、テイナイ形に用いられる動詞は「行く、終わる、持つ」など特定の動詞であり、本調査の対象者の使用と共通した語が多く、教室内の影響が覗える。趙（2015b）でもこの結果を裏付ける報告がされている。一方、日本語母語話者はどのようにテイナイ形を使っているのだろう。ザトラウスキー（1983）は電話調査の方法で、500人を対象に「○○は昨日見たか」、「○○は読んだか」という質問をし、その応答の実態を調査し、肯定の回答ではテイル形が最も少なかったのに対して、否定の回答ではテイナイ形の回答が圧倒的に多かったという結果が得られた。

趙（2014）では話し言葉コーパス（BTSJ）と書き言葉コーパス（BCCWJ）を用いて日本語母語話者の使用状況を調査している。その結果「未完了」「全面否定」「結果の状態」という３種類の用法が最も多く使われており、合計全体用例の70％以上である。そして、テイナイ形に使用された動詞は、話し言葉と書き言葉ともに、使用頻度の多い順に、「できる、覚える、持つ、出る、考える」等の語であることが分かった。江田（2020）はテイナイ形の用法を４種類に分けて、会話、小説、新書[6]のデータベースを利用して日本語母語話者の使用状況を考察した結果、「完了性の否定」「パーフェクト性の否定」「継続の否定」（本稿の「未完了」「完全否定」「結果の状態」に相当）が最も多いことが確認された。

以上のデータは学習者が実際に受けるインプットと性質が異なると思われるが、日本語母語話者の使用にも学習者の習得パターンに共通した傾向が確認できる。換言すれば、初級学習者は上記のようなインプットを受け、テイナイ形を典型的な意味・用法である「未完了」として先に「到達動詞」と結びつけ、徐々に「結果の状態」や「動作の持続」など周辺的な意味用法へと習得が進んでいくという、テイル形と異なるプロトタイプ形成を行っている可能性が高いと言えよう。この意味で、従来のアスペクト習得研究の「先入観」を考え直し、テイナイ形を独自の文法事項として取り上げ、その習得のメカニズムを慎重に考察することは、アスペクト研究において、新たな課題であると考えられる。

本稿で使用したデータは、数、内容などが限定されているため、検証の結果を一般化するにあたって、検討の余地が未だ多いと思われる。例えば、テイナイ形そのもののコーパス全体での用例数が限られているため、用例をまとめて考察することにした。従って、調査の結果は学習者の習得度の変化をある程度反映しているが、一人当たりの使用の推移を示すことはできなかった。また、調査の対象者は全て中国語母語話者であるため、異なる言語を母語とする学習者の習得上の個別性と普遍性を検証することはできなかった。特に「活動動詞」として漢語が多用されている現象が、中国語母語話者特有の現象であるかどうかを検証する必要がある。

【注】

1　部分的支持とは、検証で得られた動詞＋テイル形の結合順序、あるいはテイル形の用法の習得順序のいずれかがアスペクト仮説と一致しないことを指す。

2　本稿の調査で収集したテイナイ形に用いられる動詞はほとんど日本語の基本語彙の1004語の範疇にあり、基本語彙の特徴は「多方面の話題を通じてよく使われる」（水谷1983）であり、収集した動詞は作文のテーマの違いにかかわらず、基本の意味を表すために欠かせないものであるため、テーマによる極端な意味用法の偏りはないと判断した。

3　本稿の「完全否定」について、高橋（1988）は「過去に運動がなかったことを『していない』で表す用法は、会話文のなかではかなりひろくつかわれている。これらは『していない』の形を取っているが、持続の局面のなかにあるという継続相のアスペクト的意味ももっていないし、また、前現在の意味を積極的に示しているわけでもない」と述べ、テイル形の経験・記録用法に近いものと位置づけている。

4　本稿の4.2節、5.3節と6.1節は生成 AI「doubao」https://www.doubao.com/chat/?channel=dcFGj（北京春田知韵科技有限公司）を用いて日本語文法の修正を行ったものである。

5　劉利国・宮偉編（2014）『新教典日本語（基礎教程)』（第一、二冊）
　　劉利国・宮偉編（2015）『新教典日本語基礎教程同歩練習冊』（第一、二冊）

6　使用したデータは現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』『男性の言葉・職場編』、『新潮文庫の100冊「CD-ROM」』（８部抜粋）、日本語教育支援システム研究会編『CASTEL/J』である。

【参考文献】

和文文献

江口清子（2025）「日本語中級学習者の「テイル」の習得―７言語話者グループ間の比較―」『ヨーロッパ日本語教育』27，196-207.

影山太郎（1996）『動詞意味論―言語と認知の接点―』くろしお出版.

簡卉雯・中村渉（2009）「『ている』の習得過程に関する事例研究―難易度を左右する要因を中心に―」『国際文化研究』16，45-56.

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15，48-63.（金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房，5-26に再録）

黒野敦子（1995）「初級日本語学習者における『－テイル』の習得について」『日本語教育』87，153-164.

江田すみれ（2020）「『ている』『ていた』『ていない』のアスペクト―異なるジャンルのテクストでの使用状況と学習者の誤用―」日本女子大学博士論文（https://jwu.repo.nii.ac.jp/records/3534）.

小山悟（2004）「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性―母語の役割と影響を中心に」小山悟・大友可能子・野原美和子（編）『言語と教育―日本語を対象として―』くろしお出版，415-435.

塩川絵里子（2007）「日本語学習者によるアスペクト形式『テイル』の習得―文末と連体修飾節との関係を中心に」『日本語教育』134，100-109.

白井恭弘（2004）「非完結相『ている』の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉（編）『対照言語学の新展開』ひつじ書房，71-99.

鈴木夏代（2012）「Task-based language teaching（TBLT）における動詞形態素の習得―テンス・アスペクト仮説からの考察―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』19(2)，267-278.

SHAHBAZI Yaser（2019）「ペルシア語を母語とする日本語学習者における日本語のアスペクト形式『テイ

ル』の習得の横断的研究」『名古屋大学人文学フォーラム』6，259-274.
菅谷奈津恵（2002a）「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観―『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『言語文化と日本語教育増刊特集号第二言語習得・教育の研究最前線』，70-86.
菅谷奈津恵（2002b）「日本語のテンス・アスペクト習得に関する事例研究―自然習得をしてきた露・英・仏語母語話者を対象に―」長友和彦　研究代表（編）『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成12-13年度科学研究費研究成果報告書，102-104.
菅谷奈津恵（2003）「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究―『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『日本語教育』119，65-74.
菅谷奈津恵（2005）「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育増刊特集号第二言語習得・教育の研究最前線』，39-67.
砂川有里子（2022）「テイルの習得に与える母語の影響動詞の語彙的アスペクトに着目して―」『日本語教育連絡会議論文集』34，152-162.
ザトラウスキー（1983）「プラグマティックスから見た日本語の動詞のアスペクト―特に否定形の場合において」『言語学論叢』2，48-64.
孫猛・小泉政利・玉岡賀津雄・宮本弥生（2010）「第二言語としての『テイル』の習得におけるプロトタイプの形成」『言語科学論集』14，27-38.
高橋太郎（1988）「うちけしのテンスについて」『麗澤大学紀要』47，75-96.
陳建瑋（2014）「日本語のアスペクト形式『テイル』の習得に関する横断研究：動詞の語彙的アスペクトによる影響について」『言葉と文化』15，31-47.
趙麗雯（2014）「日本語母語話者コーパスに見られる『テイナイ』の使用実態―日本語教科書の扱い方との比較―」『韓國日語日文學研究』91(1)，453-476.
趙麗雯（2015a）「JFL 環境の中国人学習者における『シタ？』質問文の否定回答―テイナイとナカッタの選択に関して―」『日本語研究』35，155-168.
趙麗雯（2015b）「学習者コーパスに見られる『テイナイ』の使用順序―縦断的・横断的観点から―」『日本語／日本語教育研究』6，79-96.
西坂祥平（2019）「中国語母語話者による第二言語としての日本語のテンス・アスペクト習得」名古屋大学博士論文（http://hdl.handle.net/2237/00030787）.
西由美子・白井恭弘（2004）「会話における「テイル」の意味：アスペクト二構成要素理論による分析」南雅彦・浅野真紀子（編）『言語学と日本語教育』3，231-249.
橋本ゆかり（2006）「日本語を第二言語とする英語母語幼児のテンス・アスペクトの習得プロセス―タ形・テイ形の使用について―」『日本語教育』131，13-22.
松井一美（2008）「ロシア人日本語学習者のテイルの習得研究―『動作の継続』と『結果の状態』を中心に―」『創価大学別科紀要』19，69-85.
水谷静夫（1983）『朝倉日本語新講座２　語彙』朝倉書店.
柳朱燕（2013）「韓国語未完了アスペクトの第一言語習得過程における誤用の分析」『韓国語教育研究』3，68-87.

中国語文献

劉利国・宮偉（編）（2014）『新教典日本語（基礎教程）』（第一、二冊）外語教学与研究出版社.
劉利国・宮偉（編）（2015）『新教典日本語基礎教程同歩練習冊』（第一、二冊）外語教学与研究出版社.

英文文献

Andersen, R. & Shirai, Y.（1994）. Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 133-156.

Andersen, R. & Shirai, Y.（1996）. Primacy of aspect in first and second language acquisition: The pidgin/creole connection. In W.C. Ritchie & T.K. Bhatia（Eds.）, *Handbook of Second Language Acquisition*, Academic Press, 527-570.

Bardovi-Harlig, K.（1998）. Narrative structure and lexical aspect: Conspiring factors in second language acquisition of tense-aspect morphology. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 471-508.

Bloom, L., Lifter,K. & Hafitz, J.（1980）. Senantics of verbs and development of verb inflection in child language. *Language*, 3, 386-412.

Bronckart, J, P. & Sinclair, H.（1973）. Time, tenses and aspect. *Cognition*, 2, 107-130.

Comajoan, L.（2006）. The aspect hypothesis: Development of morphology and appropriateness of use. *Language Learning*, 56（2）, 201-268.

Finger, I.（2001）. The aspect hypothesis: Early development of verb morphology in L2 English. *Proceedings of the Annual Boston University Conference on Language Development*, 25（1）, 272-283.

Giacalone-Ramat, A.（2002）. How do learners acquire the classical three categories of temporality? Evidence from L2 Italian. In R. Salaberry and Y. Shirai（Eds.）, *The L2 acquisition of tense-aspect morphology,* John Benjamins Publishing Company, 221-248.

Ishida, M.（2004）. Effects of recasts on the acquisition of the aspectual form -te i-(ru) by learners of Japanese as a foreign language. *Language Learning*, 54, 311-349.

Li, P. & Shirai, Y.（2000）. The acquisition of lexical and grammatical aspect. *Journal of Child Language*, 30（1）, 237-251.

Mercer, M.（1969）. *Frog, where are you?* Dial Books for Young Readers.

Robinson, R.（1990）. The primacy of aspect-aspectual marking in English interlanguage. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 315-330.

Salaberry, R.（2002）. Tense and aspect in the selection of Spanish past tense verbal morphology. In R. Salaberry, & Y. Shirai（Eds.）, *The L2 acquisition of tense-aspect morphology,* John Benjamins Publishing Company, 398-415.

Shibata, M.（1998）. The use of tense-aspect markers in a Brazilian worker' s Japanese. *The Institute of Regional Study, the University of Okinawa annual report*, 11, 45-63.

Shibata, M.（1999）. The use of tense-aspect morphology in L2 discourse narrative. *Acquisition of Japanese as a Second language*, 2, 100-109.

Shirai, Y. & Kurono, A.（1998）. The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language*, 48, 245-279.

Stoll, S.（1998）. The role of aktionsart in the acquisition of Russian aspect. *First Language*, 18（3）, 351-377.

Vendler, Z.（1967）. *Linguistics in philosophy*. Cornell University Press.

【付記】

本稿は2025年度山東省政府公派留学プロジェクトの助成を受けたものである。

（ちょう　れいぶん：山東工商学院准教授）

Abstracts

Verification of the Aspect Hypothesis in *-te-i-nai* Form

Zhao Liwen

In this paper, we examined whether the "Aspect Hypothesis," which is said to be universal in aspect acquisition research, applies to the acquisition of *-te-i-nai* form using a longitudinal composition corpus. As a result, it became clear that the acquisition pattern of the teinai form does not conform to the Aspect Hypothesis. Therefore, it is considered important to treat *-te-i-nai* form as an independent linguistic phenomenon for further investigation.

First, this paper briefly summarizes the key findings of the Aspect Hypothesis. Next, it organizes previous studies that have tested the Aspect Hypothesis in the context of Japanese *-te-i-ru* form acquisition and points out the limitations of this existing research. Building on this foundation, in line with the research objectives of this paper, we formulate research hypotheses and verify and analyze each hypothesis using a longitudinal corpus of L2 Japanese learners' writing. Finally, based on the results of this study, we highlight the necessity of treating *-te-i-nai* form as a distinct grammatical construct.